

理論と実践の関わりを企図した演習の可能性

センター・太田佳光

1、授業の概要と工夫

本授業は、学校臨床心理専攻・学校臨床学コースの選択科目である。前期の生徒支援実践特論を受けて、その演習を主にした後期の授業科目として設定されている。受講生は、現職教員2名、学部卒生2名の計4名である。なお、本授業では、前期の講義で行った、非行やいじめなどの現代わが国の教育問題を読み解く視点のさらなる理解と、その実践への援用の可能性を明らかにすることを企図した。

学部卒生と現職教員との双方に学びの深まりが期待出来る事から、教育社会学の最新の理論を、授業者も含め、それぞれの立場から相互に読み解き議論する形式の授業を実施した。そして、その議論の中から、新しい知や、新しい実践的知識の生成の可能性を求めた。

具体的には、演習前半部分で、授業者が執筆中のテキスト原稿「逸脱の解釈学的社会学」を題材として、いじめ問題などを読み解く「解釈学的アプローチ」の可能性について議論した。また、演習の後半では、そうした解釈学的研究の実践への援用例として理解できる「ナラティブ・アプローチ」の可能性について議論し、その実践との関係性についても議論した。

2、授業への評価

授業への評価点や問題点を、学生の授業評価をもとに提示したい。なお、評価は本授業への感想や意見をテーマとした、レポートの形式で提出してもらった。

まず、いじめ問題などへの理解を深めるための「言説研究」に関して、以下のような素朴な意見があった。「私は、いじめ問題

をはじめとする教育問題などは、テレビや新聞で言われている事をそのまま受け取っていたように思います。(中略)私自身「言説」に振り回されている一人であるので、その大きさを感じました。」

また、自身の教育実践との関わりに関しては、次のような考察がなされている。「本演習の中で、エスノメソドロジー、言説研究、ナラティブ・アプローチなど、社会学の視点に立った研究手法に触れる事は、自分自身のこれまでの教育実践を振り返り、見直して行く良い機会となった。不登校を例として考えると、時期を考慮しながらの適切な登校刺激や家庭訪問など、対象児童を第一と考えた対応が主であったが、そこには『登校することが適応である』という枠組みにとらわれた教師側の前提が存在する。児童にとっての登校しないことの意味や、児童自身の内側にある物語は浮き彫りにされることはない。」

さらに、こうした方法の有効性を理解しながらも、「語られる内容について、枠組みを持たずに、解釈が可能なのか」といった疑問も提示された。

3、今後の課題

今、大学院教育には、教育実践力を持った教員の育成が求められている。そのためには、実習の重視などの取り組みに加え、自らの教育実践を振り返り省察するための、深い理論的能力や多様な視点を育成する必要があると思われる。しかし、その理論が従来型の理論のための理論では意味がない。理論と実践との相互生成を繰り返す試みを視野に入れた演習を、さらに深め、探求して行きたいと考えている。